

マウンドの死

傑作推理小説

西村京太郎

文庫オリジナル

KOBUNSHABUNKO



光文社文庫



光文社文庫

傑作推理小説

マウンドの死

著者 にし なら きょう た ろう
西村京太郎

1986年9月20日 初版1刷発行

2004年6月10日 18刷発行

発行者	篠	原	睦	子
印刷	凸	版	印	刷
製本	凸	版	印	刷

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kyōtarō Nishimura 1986

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-70404-2 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

光文社文庫

文庫オリジナル・傑作推理小説

マウンドの死

西村京太郎



光 文 社

目次

裸^{はだか}の牙^{きば} 5

マウンドの死 47

血^けに飢^うえた獣^{けもの} 83

二十三年目の夏 119

バイヤー殺人事件 161

わが心のサンクチュアリ

195

解説

ふたがみひろかず
「二上洋一」

252

裸^{はだか}

の

牙^{きば}

1

七年ぶりに弟から手紙が来た時、おれは正直にいつて、懐かしきより戸惑いが先に立った。七年間の空白の大きさというやつだろう。

手紙には、会つて頼みたいことがあるから、次の日曜日に来てくれと書いてある。

住所は、六本木のマンション。弟が、そんなところに住んでいることも初めて知った。

七年前の弟は、カメラマンの卵で、勉強中だった。六本木のマンション住まいになったところを見ると、カメラマンとして一人前になったということなのか。

奴が一人前になっていれば、会つても、また喧嘩になって、別れることになるに決まっている。理由は簡単、おれが、ヤクザだからだ。

七年前、奴が、ヒヨコの時だつて、おれにヤクザな生活から足を洗えと説教し、おれが承知しないとみると、奴のほうから別れていった。

そんな弟なのだ。一人前になっていれば、なおさら、ヤクザなおれを恥ずかしいと思うだろう。

七年ぶりに手紙を受け取りながら、戸惑いを感じたのは、そのためだ。

だが、日曜日が近くなると、おれは、やはり、胸が熱くなってきた。両親は、おれたちが子

供の時に死に、たった二人きりの兄弟だという思いが、おれの胸をしめつけるのだ。

しかし、それにしても、何故、今頃になって、弟の奴は、おれに会いたいなどといって来たのだろうか。

おれは、もう一度、奴からの手紙を読み返してみたが、いくら読んでも、わからなかった。久しぶりに会いたいから、次の日曜日の午後来てくれとしか書いてないのだから、この短い文面からでは、何も読みとることは出来やしない。

昔から口数の少ない奴だったから、手紙まで短い。

次の日曜日は、朝起きてみると雨が降っていて、おれは、何となく嫌な気がした。おれは、雨というやつが嫌いだからだ。とくに、春先のじめじめした雨が好きになれない。東南アジアへ旅行した時、スコールにぶつかったが、おれが好きな雨といえば、あのスコールだけだ。昼過ぎになって、やっと雨があがってくれたので、おれは、ほっとした。

午後三時、おれは、車で六本木へ出かけた。

手紙に書いてあったマンションは、すぐわかった。十一階建ての真新しい高級マンションだった。

赤レンガ作りの壁面も、入口のところに、小さいが噴水があったりして、なかなか、凝った造りだ。

(やっぱり一人前になりやがった)

と、思いながら、おれは、入口を入って行つた。

一階の管理人室前に、ずらりと、郵便受けが並んでいる。

「一一〇九 水島」と書いてあるのを確認してから、おれは、エレベーターに乗り、最上階に
あがって行つた。

時間が時間のせい、マンションの中は、ひっそりと静まり返っている。この豪華なマンションには、いったい、どんな連中が住んでいるんだろうか。

一一〇九号室は、南の角部屋だった。

おれは、ドアの前に立ち、ちよつとばかり服装を直してから、ベルを押した。ひょつとして、弟の奴は、もう結婚しているかもしれない。それなら、連れの女に、嫌な義兄だと思われたくなかつたからだ。おれと二つ違いの弟は、もう二十九歳になっているはずである。男にとつても、結婚適齢期だろう。

応答がない。

もう一度、ベルを押しながら、おれは、日時を間違えたかなと思つた。

ポケットから、手紙を取り出して見直したが、間違いない。次の日曜日の午後に来てくれと書いてある。

面倒になったので、おれは、直接、ドアを拳で叩いてやった。
それでも、応答がない。

おれは、ドアのノブに手をかけて廻してみた。
ドアが開いた。

おれは、足を部屋の中に入れた。が、この時点で、弟の身に何か起きているなどとは思って
いなかった。

おれと違って、弟は、暴力なんかとは無縁な存在だったからだ。

ふかふかする分厚いじゅうたんが敷いてある。足がくすぐつたい。こういう上等なじゅうた
んというやつは、おれは苦手だ。

窓のカーテンが下りているので、部屋は、薄暗かった。

「おい。健坊！」

と、おれは、昔と同じように、弟の名を呼んでみた。

返事の代わりに、おれは、嫌な匂いを嗅いだ。

おれにとつては、嗅ぎなれた匂いだった。

間違いない。こいつは、血の匂いだ。ぶん殴って、相手の顔から、だらだら血が流れたこと
もあるし、おれ自身が、左手を射たれて、血を流したこともある。

あの血の匂いだ。

おれは、奥に向かつて突進した。居間があり、その隣りが寝室だった。

ダブルベッドが置かれた部屋の床に、パンツ一枚の男が、俯伏^{うつぶ}せに倒れていた。

その背に突き刺さっているナイフ。

流れ出た血が、じゅうたんまで、赤く染めている。

おれは、膝をつき、ゆっくり、男の体を抱き起こした。

弟だった。弟の健次だった。

2

弟は、すでにこと切れている。

おれは、こんな場面を想像したことは、一度もなかった。誰かに殺されるとしたら、それは、おれのはずだった。

しばらくの間、おれは、呆然^{ぼうぜん}としていた。それから、急に、涙がこぼれてきた。だが、涙は、すぐ乾いてしまった。弟を殺した奴に対する怒りと憎しみが、それにとって代わったからだ。

おれは、弟の健次を、そっと床におろしてから、寝室を見廻した。この部屋も、カーテンが下りているので、薄暗い。

おれは、枕元のスタンドをつけた。

壁に、若い女のヌード写真のパネルが、十枚ばかりかかっている。きれいな写真だ。多分、弟が撮ったのだろう。

衣裳ダンスを開けてみた。

二十着近い背広が、ぶら下がっている。おれは、その一着ずつを調べてみた。ポケットの中に、犯人の手掛かりになるようなものが入っていないかと思ったからだ。

五、六着の背広を調べた時、ポケットに小さな手帳が入っていた。手帳というよりアドレスブックだった。

女の名前が、七名ばかり書き込んである。弟が使っていたモデルの名前か、それとも、交際していた女たちかはわからないが、名前の横に電話番号も書いてあるから、おれは、当たってみる気になって、そのアドレスブックを、ポケットにねじ込んだ。

おれは、もう一度、弟の健次に眼をやった。これで、二度と会えなくなるのだ。そう思い、また、床に膝をついて、血の気がなくなっている顔に、そっと、手を触れた。

その時になって、おれは、弟の左手が、何かを強く握りしめているのに気がついた。厚い紙のようなものだった。

おれは、硬直した指を、一本一本開いていった。

小指が押し開かれたとき、床に落ちたのは、くしゃくしゃになった写真だった。

ポラロイドで撮ったカラー写真である。女のヌードが写っている。

ベッドの上に、だらしなく両足を広げている。セックスのあとって感じだ。

だが、肝心の顔の部分が、引きちぎられて失^なくなっている。

最初から、引きちぎられていたのか、それとも、犯人が引きちぎっていったのか、まだわからないが、おれは、その写真も、ポケットに放り込んだ。

居間も調べてみたが、手掛かりらしいものはない。写真や、カメラがほとんどないのは、別の場所に仕事場があるのだろうと、おれは考えて、部屋を出た。

マンションを出、大通りを渡ったところで、おれは、電話ボックスを見つけて、一一〇番を廻した。

「六本木のNという十一階建てのマンションに、若い男の死体がある」

「もし、もし。死体だって？」

「そうだ。十一階の九号室だ。すぐ行ってくれ」

「あんたの名前は？」

「そんなことは、どうでもいいだろう」

おれは、受話器を置いて、電話ボックスを出た。

一一〇番したのは、弟の遺体を、あのままにしておきたくなかったからだ。だが、おれは、犯人逮捕を、警察に委^{まか}せる気は、全くなかった。

弟を殺した奴は、この手で見つけ出してやる。そのあと、どうするかは、その場になってからのことだ。

車に乗って、自分のアパートに戻ると、ドアの鍵があいていた。

(安子が来ているのか)

寒がりの安子は、おれの部屋に來ると、二台のストーブに火をつけ、その上、台所のガスにも火をつけ、やかんをかける。そうしておいて、裸になってベッドで眠るのが好きな女だ。

ドアを開けて、中に入ると、案の定、むっと暑くなっている。

床には、脱ぎ捨てた下着が散乱し、ベッドの中では、安子が、軽い寢息をたてていた。

可愛い寝顔をしている。わがままで怒りっぽくて、お天気屋の女だが、それでも可愛い女だ。いつものおれなら、一緒に裸になって、彼女の横にもぐり込むのだが、今は、そんな気にはなれなかった。

おれは、近くにある椅子に腰を下ろし、ポケットに放り込んできた写真を取り出した。

顔さえついていけば、どこの誰か、見つけ出すのに、そう苦労はしないですむだろうが、その肝心の部分が、引きちぎれてしまっている。

いい体をしている女だ。乳房も豊かだし、腰も張っている。身長は一六〇センチぐらいだろうか。

さぞ、抱き応えがあるだろう。

陰毛に、特徴があった。ちぢれていて、きれいな逆三角形を、形づくっている。

だが、弟は、何故、こんな写真を撮ったのだろうか？

おれには、それが疑問だった。ポラロイドカメラなんか使わなくなつて、カメラマンだったんだから、女のヌードなんか、いくらでも撮れたらう。現に、寝室には、きれいなヌード写真が、何枚もパネルにして、かけてあつたではないか。

それなのに、何故、こんな秘密めかした写真を撮ったのだろうか。これは、明らかに、きれいに撮ろうとしたものではない。セックスのあとの、快楽の余韻を楽しんでいる女の写真だ。ちぎれた顔は、恐らく、眼を閉じ、口を半開きにして、まだ陶酔の中にいる表情をしているだろう。

おれは、ベッドに近寄り、マットを持ち上げ、そこに隠してある拳銃を取り出した。

その拍子に、寝ていた安子が、床に転がり落ちた。

裸のお尻から床に落ちた安子は、きょとんとした顔で、おれを見上げた。

「あたし、どうしたの？」

「寝惚^{ねぼ}けて落ちたんだ」

「ふーん。お風呂に入りたいな」

「じゃあ、入ってろよ。おれは、ちょっと出かけてくる」

「一緒に入ってくれないの？」

安子の声が、とがってきた。

「用があるんだ。帰って来たら、可愛がってやるよ」

「バカ！」

急に、枕が飛んできた。

おれは、苦笑して、廊下へ逃げ出した。

3

車の運転席に腰を下ろしてから、おれは、拳銃の点検をした。

ベレッタ・モデル1934。おれが、このイタリア製の小さなピストルが好きなのは、構造が簡単で部品数が少なく、分解がしやすいからだ。それに、故障も少ない。

弾倉に、七発入っているのを確かめてから、ポケットに入れ、車をスタートさせた。

電話ボックスを見つけて車を止め、中に入ると、弟のアドレスブックにあった最初の女のダ